

歴史講義録⑨文化史

関連動画

室町時代

金閣

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v04625/v0462500000000540146/>

南禅寺

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09833/v0982700000000541229/>

銀閣

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990019_0000

大徳寺

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990005_0000

大坂城

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990256_0000 犬山城

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990068_0000

江戸時代

桂離宮

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990001_0000

修学院離宮

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990324_0000

日光東照宮

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990298_0000

輪王寺

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09829/v0982700000000541085/>

姫路城

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004990066_0000

名古屋城

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09832/v0982700000000541217/>

文楽「曾根崎心中」

<http://www.youtube.com/watch?v=MB4Sln7qa2U>

奥の細道（山寺）

<http://www.youtube.com/watch?v=ERyJF6DB3Rg>

高田の独り言

足利義政 - 「和の空間」を作り出した男

応仁の乱のときに将軍の位についていた足利義政は、政治家としては全くやる気がないように思えてきます。しかし芸術的・文化的センスは抜群で、私はその後の日本人の生活文化に彼ほど影響を与えた武士はないのではないかと思います。そしてそれを証明するのが東山の慈照寺なのです。



金閣が頭を金色に染め、貴金属と化粧品とブランドファッションで体中に身にまとったバブル期の女性ならば、銀閣はそれらを全てとりさったすっぴん美人です。そしてその「なにもない」ように見せながらじつは奥深い美を内に秘めたものを、日本人は今でも好む傾向にあるのです。金閣は京都の観光地の代表ですが、何度も行きたいという人は少ないのではないのでしょうか。それに比べて銀閣は実際リピーターが多いといいます。また、畳に床の間にふすまに障子という和室が日本の多くの人にとって最も落ち着ける場所の一つであるとするならば、その源流こそこの寺の東求堂なのです。

そして義政が直接生み出したわけではありませんが、村田珠光の茶道や池坊専

慶の立花、雪舟の水墨画、龍安寺や大徳寺大仙院の枯山水庭園など、和風のライフスタイルに欠かせないものの多くが義政の時代に生まれたのです。

床の間には水墨画と生け花がみえる畳の部屋に座って、障子の向こうの石庭を見ながら抹茶をいただくこの落ち着きこそ、多くの日本人が自分を取り戻せる場所であり、それがリピーターを呼び寄せる銀閣の魅力となっているのではないのでしょうか。そしてそのような美意識の基礎を築いたのが足利義政と東山文化だったのです。

一方この時代には東京で言うならば1945年の東京大空襲なみに町中が火の海と化した室町時代の「失われた十年」、応仁の乱の時期です。それをよそめに東山文化を完成させたのか、それがゆえにより一層東山文化が輝いたのか、興味がつきません。

派手な文化と地味な文化

派手な文化と地味な文化、どちらがより「和風」な感じがするのでしょうか。何となく日本文化を「わび、さび」に代表される地味な文化こそより「和風」な感じがしませんか？この感覚を作ったのは、応仁の乱のときに将軍の位についていた足利義政かもしれません。彼は政治家としてはともかく、その後の日本人の生活文化や美意識に極めて大きな影響を与えましたが、その結晶が銀閣や東求堂で知られる慈照寺です。金閣が頭を金色に染め、貴金属と化粧品とブランドファッションで体中に身にまとったバブル期の女性ならば、銀閣はそれらを全てとりさつ

た「すっぴん美人」です。そして「なにもない」ように見せながらじつは奥深い美を内に秘めたものを、日本人は今でも好む傾向にあるようです。また、畳に床の間にふすまに障子という和室が日本の多くの人にとって最も落ち着ける場所の一つであるとするならば、その源流こそこの寺なのです。

一方で日本にはかなり豪壮・雄大で派手な文化もあります。その代表が桃山文化です。信長、秀吉といった新興大名が天下統一を始めると、文化は豪華絢爛で大規模なものとなっていきました。例えばそれまでの絵画は掛け軸や絵巻でしたが、桃山時代の障壁画はふすまや屏風で部屋全体を絵で囲むという空間芸術を形成しました。部屋で絵を見るのではなく、「絵の部屋に身を置く」ようになったのです。



江戸時代になってもしばらくその傾向は続きます。例えば日光の建築群は、日本にこのような華麗なものがあったのかと思うほど豪華な彫刻の世界に入り込むという趣向になのです。

ところで何事も派手になりすぎると、地味なものを求めて落ち着きたくなるものです。ステーキと中華料理のコースを食べた後にお茶漬が食べたくなるよう

な感じでしょうか。そしてその例が茶道です。きらびやかな装飾を一切捨て、質素な二畳の茶室に、にじり口をくぐって入り、お茶をいただくのも、豪華絢爛な体制文化に対する反骨精神を体現したもののなのです。

地味な反体制の茶道と派手な体制の茶道が融合するのは江戸時代になってからの桂離宮に見られます。この数寄屋造りの建築群は、一つ一つは地味な美しさを保つが、それらが群れをなすその規模が半端ではない。人工的な離宮というよりも、自然空間そのものといった感じである。金閣や東照宮の派手な文化と銀閣や茶室の地味な文化の融合。それが桂離宮の美なのです。

天守と日本人

国内の120カ所余りの城郭を歩き回った私は、埼玉県川越の方に「川越城は素晴らしい。」と言ったところ、「あそこには城がないですから。」という答えが返ってきました。どうやら日本人にとって「城」＝天守を指しているようで、これは城＝城壁＋城門という中国・朝鮮文化とは非常に異なるものです。戦時には敵の侵攻をいち早く察知するため、平和時には権威の象徴として機能した天守こそ、日本人にとっての「城」なのであり、これがなければ「城」とはみなされないのかもしれない。逆に中国人や韓国人にとって「城＝天守」というイメージはありませんので、天守をみて「塔」とかいう方がいても、不思議ではありません。

さて、日本には桃山・江戸時代の天守が12カ所残されていますが、特に姫路城

は、江戸時代の建築群がそっくりそのまま残っていることからしても日本で他に類のない素晴らしいものです。目下天守の補修中で全景を見ることはできないのですが、私自身日本中の城を歩き回った結果、やはり姫路城に匹敵する城郭は残っていないと実感しました。世界遺産になるのも当然のことでしょう。

ところで日本各地でみかける天守の多くが昭和になって鉄筋コンクリートで造られたものです。日本三名城になっている大坂城、熊本城、名古屋城などにしても、全てそうです。江戸時代以前の天守が現存しない理由は大きく分けて三つあります。一つは江戸時代に落雷や火災にあったこと。江戸城や二条城がその代表です。二つ目は明治維新時に封建時代の遺物と見なされて壊されたこと。小田原城などがその例で、幕末から明治20年代までで約40カ所が破壊されました。まさに日本版「文化大革命」でした。そしてもう一つが昭和20年の各地の空襲において、米軍に焼かれたことです。この年の5月～8月の三カ月で、米軍は七カ所の天守と首里城正殿を焼いています。広島城や名古屋城がその例です。



↑名古屋城天守炎上記録写真

城マニアの私は、長い間「鉄筋コンクリート天守は邪道」と決めつけていました

が、最近意見が変わりました。名古屋城に行った時、「尾張名古屋は城でもつ」と地元民に愛されてきた名古屋城天守が空襲に遭って燃える写真が展示されていました。多くの城を見てきましたが、真っ向から平和を主張する城はここ位なものでした。

昭和30年代になるとようやく戦災から復興し、高度経済成長の道を歩むようになりましたが、戦災で失った天守を、空襲でも決して燃えない、原爆でも崩れない鉄筋コンクリートで再建するというのは戦災に遭った国民の復興の象徴だったのです。木造建築を表面だけコンクリートで再建するというのは文化財としての価値を無視していると思ってきましたが、このような考えこそ復興期に我が町の天守の復興を被災した自分自身の生活の立て直しに重ね合わせた人々の心を無視してきたのに気づいたのはかなり最近のことです。

それにしても天守の存在理由は時代の変遷につれて変わってきました。軍事拠点であった戦国時代。権力の象徴であった江戸時代。捨てざるべき封建時代の産物とされた明治初期、空襲の目印だった昭和20年夏、そして復興のシンボルだった昭和30年代。天守が持たされてきた数奇な運命は、当時の時代の流れを如実に表しています。

町人が文化の担い手に

これまでの日本文化史において、将軍や貴族や天皇が文化の担い手になることばかりで、町人中心の文化というものは古墳時代以降ありませんでした。本格

的な町人（とはいっても豪商中心ですが）の文化は江戸時代になってからです。

まずは「歌舞伎」の語源は「かぶく（傾く）」すなわち crazy という意味なのですが、これは女の阿国が男装しておどったところからそう言われたとのこと。



↑歌舞伎舞台「助六」（展示・江戸東京博物館）

突如京の都に現れた「男装の麗人」、出雲阿国に都人たちは熱狂します。たとえなら寛永の宝塚歌劇とでもいいでしょうか。男女の境界をなくすのは、古くは土佐日記の紀貫之からはじまり、戦時中の川島芳子や宝塚、戦後の三輪明宏、平成のIKKOやなど、マツコデラックスなど、儒教が支配的ではない日本の文化の特徴といえましょう。

江戸時代も中期になり、武士たちが男女の区別を厳しくつける朱子学を学ぶようになると、完全に町人だけのものとなっていきます。

また、元禄時代の浮世絵を代表する「見返り美人」は、様々な意味で革命的でした。それまで武士の妻や貴族の女性を絵に描くことはあっても、町人の女を描くというのはいえなかったことでした。しかしこの時代は、町女はもちろんのこと遊女、すなわち今で言うキャバ嬢や風俗嬢までモデルになるのです。また見返り美人

のアンブルにご注意ください。斜め後ろから描くというのは、それまでの正面か斜め前から描くという常識を覆します。そして日本女性のみなさまは御承知の通り、着物姿の女性のどこに注目するかというと、後ろ姿ですよね。着物は後ろ姿で勝負。だから帯などにしても、後ろ姿が派手なのです。先日国立博物館で久しぶりにこの作品を見たのですが、やはりこの作品は「美人」以上に帯が目立つのです。とにかく色々な意味でそれまでの絵画を覆すのがこの絵なのです。

また、元禄時代は小説もすごいが出てきます。井原西鶴の「浮世草子」ですが、彼は日本史上ポルノグラフィを書いて教科書に載った唯一の人物で、主人公のけた外れな性遍歴（一生に四千人弱！）というめちゃくちゃなお話です。平安時代の「源氏物語」でさえ、一生に五十人あまりなのに……。絶句です。